

# シェイクスピア学の源流

——近代日本演劇の原点——

川戸道昭

明治期前半の様々な文学活動を見わたして、第一に目につく特徴は、それが当時の学校教育と切っても切れない関係にあったということである。当時の高等教育機関は、とりわけ西洋文学に関する講義が最も充実していた東京開成学校・東京大学は、そこをとおして西洋文学が日本に輸入される最大の窓口となっていた。その教場で講じられる文学の講義は、またそこで使用される教科書や図書館に備わる新来の文学書は、将来の日本の文壇・劇壇の担い手たちが新たな文学のあり方を模索する際の重要な知識の供給源となっていた。明治十年代から二十年代の半ばにかけて、近代日本文学の創造を指す知識人たちに最も大きな影響を与えたものは何かといえ、間違いなく東京大学などの文学講義とそこに備わる西洋文学書もその有力候補の一つということになるだろう。新しい小説や詩歌の創造はもちろんのこと、新しい文学論の試み、新しい演劇運動の模索等々、すべてがそこに胚胎したといっても決して過言ではないのである。それらの高等教育機関の講義や文学書の中に、近代の黎明期に生きる文学者たちはいかなる文学上の啓示を見出し、そこからいかなる創造の糸を紡ぎ出していったのか、その実態と経緯を、東京開成学校・東京大学におけるシェイクスピアの講義を中心に辿ってみることにする。

## 1

日本の学校の教室で、最初にシェイクスピアが取り上げられたのは一体いつ頃のことだろう。夏目漱石が大学でデイクソン教授の教えを受けた明治二十年代の初めの頃か、それとも坪内逍遙が大学に在籍した明治十年前後のことか。否、その時期はもっと早く、『新体詩抄』の作者の一人・井上哲次郎が予科の学生であった明治八年の前半にまで遡る。場所は、東京開成学校、講師

は、本邦最初の「英文学教師」ジェームズ・サマーズであった。それ以前にも、地方の外国語学校などで、外来のリーダーに載ったシェイクスピア関係の文章が読まれることはあったかもしれないが、専門的にそれが取り上げられるのは、サマーズの講義が最初であったと考えていい。

では、そこでサマーズが行ったシェイクスピア講義とは一体どのようなものであったのか。さいわい、当時の『東京開成学校一覽』<sup>(1)</sup>(英文)に、学年末試験の問題が掲載されているので、われわれはそれを頼りにある程度の内容を推測することができる。

サマーズが文学を担当していたのは、専門課程に入る前の「普通科」の授業であったが、そのうちの最上級の「第一級」に出題された問題は次のようなものである。

- 二 劇とは何か、またそれは英文学にいかなる影響を与えたか。
- 三 イングランドにおける演劇の歴史を簡単に述べよ。最初に英語の悲劇を書いたのはだれか。その最初の二幕を分析せよ。
- 四 チョーサー、シェイクスピア、ミルトンはそれぞれ英文学にどんな影響を与えたか。
- 五 シェイクスピアはなぜかくも高い評価を受けているか、またスペンサーはなぜシェイクスピアほど読まれないのか。
- 六 それらの作家の特徴およびミルトンの特徴を述べよ。
- 七 ハムレットが父の亡霊に呼びかける台詞を一〇行引用し、そのうちの教行をパラフレーズせよ。
- 八 次の表現を説明せよ。<sup>(2)</sup>「この後に『ハムレット』一幕五場から抜粋した一五行の英文が続くが、英文に関しては注参照」

これは「第一級」に課された全十問(原文は英文)のなかから、シェイクスピアに関連する問題七問を抜き書きしたものであるが、ここから読み取れる一つの特徴は、まず文学とは何か、劇とは何か、過去の偉大な作家の文学史上の位置づけはどのようなのか、というような大きな観点から問題を捉えていることである。個々の作品はその大きな流れとの関連で部分的に取り上げられているにすぎない。こうしたサマーズの出題方法は、さらにいうと彼の文学の講義法は、西洋文学の何たるかをまったく理解しない当時の学生にとっては、いたって当を得た講義法であったと思われる。それによって彼らは西洋文学の歴史の輪郭とそ

の歴史を構成する文学作品の実例を頭に刻みつけることができたのである。

要するに、サマーズの講義には、その柱となるものが二つあった。一つは、文学史で、外の一つはその文学史の流れと関連させながら随時取り上げる著名作家の文例である。そのうちの文学史の方はいずれ何かのテキストをもとに講じられたものである。うから一まずおくとして、ここで問題にしたいのは、そうした文学史との関連で購読される個々の作品の方である。それは時にシェイクスピアの劇であったり、また時にミルトンの詩であったり、さらに時代が下ってグレーやロングフェローの詩になったりするのだが、興味をそられるのは、そうした個々の作品の取り上げ方にもまた、サマーズ独自の方針のようなものが見て取れるということである。たとえば、上にあげた問題でいうならば、問七、問八の『ハムレット』に関する問題である。ここに取上げられているのは、『ハムレット』のごく一部、すなわち一幕四、五場のハムレットが父親の亡霊と対面するわずか十数行ばかりの台詞であり、これをもってシェイクスピアの作品一篇が購読されたとするには、はなはだ不十分といわざるをえないものである。それは外の作家の場合も同じで、ミルトンならば「アレグロ」および『コーマス』の一部というように講読の範囲はごく限られたものであった（詳しくは本全集の28巻に掲載した拙文「西欧文学との出会い」によって確認されたい）。

なぜ、そのような狭い範囲の講読にとどまっていたのかというと、それには考えられる理由が三つある。第一に、文学の授業を聴く学生たちにそうした古典の精華ともいべき作品を最初から最後まで読み通すだけの文学上の基礎知識も語学力も備わっていないなかったことである。そして第二に、それを読もうと思っても、それらの作品の原書を日本人が容易に手にすることができなかったことである。サマーズがテキストとして採用したのは、様々な作家の作品を一書に収録した文例集、具体名を挙げるとアンダーウッドの『英文学集』と、同じく『米文学集』であった。<sup>(3)</sup>

そうはいうものの、それらの文例集に掲載されているのは百名を越える文学者の数百篇にも及ぶ短編ないしは中・長編の抜粋であり、サマーズがそのつもりならば、そのうちの十や二十の文章例を教室で取り上げることでも充分可能であったはずだ。が、彼はそれをしなかった。サマーズが試みたのは、シェイクスピアやミルトンなど著名文学者のごく限られた長さの台詞や詩篇を二、三篇選んで、それを徹底的に朗読・暗誦させるという方法であった。そこには、原書の輸入事情などとは無縁の、サマーズ独自の教育方針のようなものがうかがえる。つまり、その教育方針こそが彼の講読範囲が限られていたことに対する第三の理由にしてかつ最も大きな理由というわけである。これは、のちに彼が札幌農学校で英語の授業を担当したときの報告書に記載され

ていることだが、サマーズは自らの英語の教育方針についてこんなことをいつている。

《とかく陥りがちな間違いは、一つ事が十分に理解されないうちに次の事項へと生徒を駆り立てていくことである。それゆえ、<sup>(4)</sup>語学を学ぶ生徒には、時折、傑れた作家の文章を暗記させることが肝要で、彼らの学習意欲を引き出すのに効果がある。》(『札幌農学校第五年報』明治十四年より。原文英文。)

サマーズには、東京開成学校時代の「申報」(自らの授業の報告書)が残されていないため、この札幌農学校当時の授業の概要報告は、彼自身の言葉でその教育方針が語られているほとんど唯一の文章として注目されるものである。ここから推測できるのは、彼の東京開成学校における授業もおそらく札幌農学校時代と同様、独自の教育方針に基づくものであったということである。いまその教育方針を簡単に要約してみると、こういうことになるかと思う。すなわち、大事なのは、「傑れた作家」の文章を選んで、それを急がずに徹底的に朗読、暗誦せしめることだ、と。こうしたサマーズの教育方針を裏づける資料として、当時札幌農学校で実際に彼から英語を習った生徒の証言が残されているので、それを紹介しておく、たとえばそのなかの一人、武信由太郎(のちの早稲田大学の教授)は、次のように言っている。「入学後一年位して今のサンマース嬢のお父さんが同校へ見へましたが、中々文学の素養のあつた方で、同氏から私共はマコーレーの *Lays of Ancient Rome*、ゴールドスミス *The Deserted Village* やグレーの *Elery* などを盛んに暗誦させられた。又教科書としてはアンダーウッドの *British Writers* の講義があつた。……それから科外として朗読(*elocution*)や討論(*debate*)が時々催された。*elocution* には頭本氏がシーザーのアントニーをやつたのと、自分がデ、クエンシーの一文をやつたこと丈を記憶して居る」と。<sup>(5)</sup>つまり、サマーズは、「申報」に報告しているとおりの授業を札幌農学校で行っていたということになる。

この「傑れた作家」の文章を取り上げて、それを徹底的に朗読、暗誦させるというやり方は、おそらく東京開成学校当時の授業にもそのまま当てはまる彼独自の教育方法であつたと思われる。彼が、札幌農学校で教えたのが東京開成学校を去つたわずか四年後のことであつたこと、あるいはそこで取り上げた作品がいずれも短編で、なかにはグレーの『墓畔の哀歌』(エレジー)など東京開成学校で読まれたのとまったく同じ作品もあつたということ、さらには先ほどの試験問題の内容などから判断して、ま

ずそれは間違いないものと思われる。

では、サマーズがそのように模範文の「朗読」と「暗誦」を重んじる狙いは一体どこにあったのか、それを確認するために再び彼の報告書に注目してみよう。

《週に一時間は英文学の古典作家の傑れた文章をくりかえし朗読する訓練に当てられた。これによって生徒は英語の模範的な文体に親しみ、発音が改良され、英語の真髄ともいうべきリズムのながしさを理解したものと確信する。》<sup>(6)</sup>（同上、原文英文。）

これを先ほどの試験問題と重ね合わせてみるならば、サマーズのシェイクスピア講義の実態が浮かび上がってくる。つまり、彼が『ハムレット』を取り上げる主眼は、それを一篇の演劇作品として読むことよりは、そこから抜き出した台詞の一部を生徒に「くりかえし朗読」させ、それによって、大作家の模範文に親しませ、「英語の真髄ともいうべきリズム」を体得させるということに置かれていた。そのことは彼の試験中にみえる、「ハムレットが父の亡霊に呼びかける台詞を一〇行引用し、そのうちの数行をパラフレーズせよ」という問題からも推察できる。このような問題は、基本となる文章の朗読・暗誦を前提としてはじめて成立する問題とすることができるのである。

こうした朗読・暗誦中心の文学の授業は、われわれ現代人の目には多少変則的な授業のように映るかもしれないが、近代の黎明期に生きる当時の若者にとってはそれなりに有効な授業であったと思われる。彼らは、傑れた作家の模範文章を朗読・暗誦することによって、英語と日本語の間に存在する言語構造のちがいを肌で感じ取っていくことができたのである。やがてそこから、英語のスタイルやリズムに対する感覚、アクセントへの関心、日本語との音声構造の相違に関する意識が芽生える。それを意識するなかから新しい演説法が生まれる。新しい詩歌の試みが生じる。新しい演劇における感情表現の模索が始まる。井上哲次郎らの新体詩創造の試みや、坪内逍遙の演劇刷新運動にみるように、それまでの日本に存在しなかった西洋起源の自己表現法や感情表白法へと至る道が、それによって開かれていったのである。なかでもシェイクスピアの講義との関連で注目しなければならぬのは、坪内逍遙が明治二十四年に東京専門学校内に設立した「朗読会」なる研究会である。これは、逍遙本人もいうように

「未来の大ドラマチストに向つて蒞席を準備する」ために脚本の朗読法を研究しようという会であり、それがやがて明治三十年代末の文芸協会の設立にもつながっていったことを思うと、わが国の近代演劇史上見逃すことのできない大変重要な出来事であった。

本稿の目的が、明治前半のシェイクスピア講義の影響を検証するというところにある以上、われわれとしても当然その問題に調査の光をあててみないわけにはいかないのだが、しかし、それを問題にする前に、ここでは是非とも明らかにしておかなければならない重要な事柄が二つある。すなわち、明治十年前後のシェイクスピアの原書の輸入状況と、もう一つ、東京開成学校が東京大学へと改組された明治十年以降の同校におけるシェイクスピア講義の実態である。

## 2

ということでは、まず、明治十年前後のシェイクスピアの原書の輸入状況を概観することから始めよう。先ほど私は、サマーズが東京開成学校で文学の講義を行っていた明治八、九年には、シェイクスピアの作品を読もうと思つても、いまだその原書を日本人が容易に手にすることができなかった旨を述べたが、その根拠とするところは、明治八年に刊行された『東京開成学校文庫書目 英書之部』<sup>(8)</sup>という洋書リストである。本リストは明治八年当時、東京開成学校が所蔵していた英書のリストで、書名の後には所蔵冊数がそれぞれ明示されていて、なかには数十冊、百数十冊といった重複書物も少なくないところから、これが基本的に同校の教科書・参考書リストであったと考えていいものである。しかし、その「文学」の項をみても、シェイクスピアの書物は一冊もない。あるのは「文学」のなかの「文例集」部門に名前があげられたアンダーウツドの『英文学集』と、同じくT・B・ショウの『英文学集』<sup>(9)</sup>ぐらいである。明治八年当時、東京開成学校の生徒たちは図書館にいても『ハムレット』の原書さえ目にするのができなかったのである。

ところが、明治九年の『東京開成学校一覽』<sup>(10)</sup>に記載された「英文学 修辞学 論理学」の「教科書目」をみると、そこには「モルレー氏著 英文学歴史」「アンドルウッド氏著 英文学袖珍」に加えて、最後に「シェイクスピア」という記載がでてくる。ということは、明治八年以降シェイクスピア関係の洋書の補充がなされたとも考えられるが、私のみるところでは、どうもそうではなかったように思う。おそらくこれもシェイクスピアの台詞を抜粋した文例集か何かが使われたということでは、『ハムレッ

ト』や『マクベス』など単独の作品が使用されたのではなかったのではないか。「シェイクスピアール」とあるだけで作品名が記載されていないことや、サマーズの授業方針などから考えてどうもそう思われる。加えて、明治十年九月に学校当局が発行した『東京大学法理文学部 図書館英書目録』<sup>(11)</sup>というのも有力な証拠の一つに挙げられる。そこに記載されているシェイクスピアの作品は、ダイスの編纂した九巻からなる作品集と「シェイクスピア・ジエムズ」と題する名文集のわずかに二種類にすぎない。サマーズが去ってから一年以上経った明治十年九月になっても、シェイクスピアの作品はこの二種類しか所蔵されていなかったとなると、やはり、東京開成学校の学生が図書館で目にしたシェイクスピアの原文というのは、各種「文例集」の中の抜粋がせいぜいというところではなかったか。同校にシェイクスピアの書物が多少なりとも入ってくるのは、明治十年九月以降のことであり、そのときはすでに東京開成学校ではなく東京大学と改められた後のことであった（明治十年四月改組）。

では、その当時の外の図書館はどうであらう。たとえば、現在の国立国会図書館の前身である東京書籍館などにはシェイクスピアの書物はすでに入ってきていたのか。私はそのことを確認しようと様々な資料を調査しているうちに、一つ大変重要な文献に遭遇した。それは明治九年（序文の日付は六月）に東京書籍館から発行された洋書カタログである。<sup>(13)</sup>明治十年以前の洋書の輸入状況に関しては、丸善など書籍の輸入に携わった業者の記録もまったく残されておらず、本カタログは当時日本に将来された洋書の明細を知る上で二つとない貴重な資料といえる。それによると、当時同書籍館に所蔵されていたシェイクスピア関係の原書は全部で六種類あり（外にドイツ語訳が二冊ある）、そのなかにはR・G・ホワイットの編集した十二冊からなる作品集や、W・G・クラークとW・A・ライトの編集した有名な「クラレンドン・プレス」<sup>(15)</sup>発行の四冊（『ハムレット』『マクベス』『ヴェニスの商人』『リチャード二世』）も含まれている（以下、同プレス刊行の書は「クラレンドン」版と略す）。東京書籍館の書物は現在の国会図書館に引き継がれた書物であるから、今でも同図書館に行けば閲覧することが可能である。というところで早速そこへ行って「クラレンドン」版四冊について調べてみたところ、そのすべてに「明治八年文部省交付」の朱印が押されていることを知った。サマーズが東京開成学校で教鞭を採っていた明治八年の段階でも、人は東京書籍館に行けば『ハムレット』や『マクベス』などシェイクスピアの名作に触れることが可能であったのである。

さてそれでは、東京開成学校が東京大学と改組されてからのシェイクスピアの輸入状況はどうであったのか。先にも述べたとおり、明治十年九月の段階では、わずかに二種類のシェイクスピアの原書しか架蔵されていなかった東京大学の図書館にそれが入

つてくるのは、一体いつ頃のことであったか。さいわい東京大学法理文学部の図書館からは、明治十年の『英書目録』を皮切りに、十一年、十三年と洋書の目録がたて続けに三回発行されていて、それを照合すれば同図書館の原書の段階的輸入状況が明らかになる。その照合を試みた結果、シェイクスピアの原書の補充状況にはつきりとした変化の兆しが見えてくるのは明治十年九月から翌十一年九月にかけての一年間であるということがわかった。その間に補充されたシェイクスピアの原書は全部で六種類、なかにはH・N・ハドソンの十一冊からなる作品集、<sup>(17)</sup>同じくR・G・ホワイットの十二冊の作品集、そしてW・G・クラークとW・A・ライトの「クラレンドン」版六冊『ハムレット』『リア王』『マクベス』『テンペスト』『ヴェニスの商人』『リチャード二世』といった重要な選集・作品集も含まれている。

このように明治十年九月から翌年九月までの一年間にシェイクスピアの原書はかなりの程度補充されたが（外の文学者の原書も増えているがシェイクスピアの増加はとくに著しい）、その背景にあつたことを想像してみるに、おそらく明治十年四月にサマーズの後を襲う形で英文学教授に就任したアメリカ人ウイリアム・ホートン<sup>(18)</sup>の影響が少なくなかつたのではないかと思われる。ホートンは着任早々の明治十年度に、早くも「クレーク氏編纂ノシエキスピール文集」を使用して文学部の二年級に英文学を講じている。そしてその後も、『ジュリアス・シーザー』『ヴェニスの商人』『ハムレット』『リア王』（十一年度、文学部三年）、『ジュリアス・シーザー』『ヴェニスの商人』『テンペスト』『リチャード二世』（十二年度、文学部二年）、『ヴェニスの商人』『マクベス』『ハムレット』（同、文学部三年）というようにシェイクスピアの主要作品を次々に東京大学の教室で取り上げていった。<sup>(19)</sup>そうした点からみて、東京大学の文学作品の原書、とくにシェイクスピアのそれが補充された背景にはホートンの力が大きく与かつていたと考えてまず間違いないものと思われる。とりわけ注目されるのは、彼が教室で取り上げた作品と、明治十年九月当時東京大学に所蔵されていた「クラレンドン」版の原書が『ジュリアス・シーザー』一書を除いて完全に符合していることである。同版は縦十七センチほどの小型本で、巻末に百頁前後の注釈があるために、学生用のテキストとしては打つてつけのものであつた。当時そのような注釈書はめずらしく、坪内逍遙の「回憶漫談」と題する明治十年代の文学状況を回想した一文にも、「東大の図書館も其頃のは甚だ貧弱で、シェイクスピアの注釈は、ロルフとやつと出はじめてゐたクラレンドン版ぐらゐのもの」<sup>(20)</sup>だつたと回想されている。ちなみに同版中の『ハムレット』が、オックスフォードのクラレンドン・プレスから刊行されたのは一八七二（明治五）年のことである。ホートンとしても、西洋文学の古典に馴染みの薄い日本の学生たちの理解の一助となすべく、よ



うやく出はじめたばかりの注釈書に注目し、それをいち早くテキストとして利用していったものと思われる。

では、そのようなテキストを用いて行われたホートンのシェイクスピア講義とは一体どのようなものであったのか。上に引用した坪内逍遙の「回憶漫談」によってそれを確認してみることにはしたい。

《文学部といつても、当時の政治、経済が主で、西洋歴史、哲学史、国文、漢文等で時間が大部分充たされ、英文学はたかゞ六時間位のみであつたらう。英文学はホートンといふ紳士の教授の受持で、チョーサーやスペンサーやミルトン、シェイクスピアを主として講じた。学殖は豊富らしかつたが、講義振りは純然たる学究だつた上に、眠たい、低い調子でポツリポツリ、而も私にはやつと六七分通りしか解らない英語で講じたのだから、課目には同情を持ちながら、なまけ者の私などは余り裨益する所がなかつた。シェイクスピアの「ハムレット」の試験に王妃ガートルードのキャラクターの解剖を命ぜられて、初めての時には其意味が解りかね、「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい点を付けられ、それに懲りて、図書館を漁り、はじめて西洋小説の評論を読み出した。<sup>(21)</sup>》

シェイクスピアの講義との関連で注目されるのは、文章なかほどの『ハムレット』の試験に王妃ガートルードのキャラクターの解剖を命ぜられ」という点である。ここから推し測れる、ホートン教授のシェイクスピア講義の特徴は、作中人物の性格分析ということに力点を置く、本格的なシェイクスピア講義であつたということである。例によってこの証言を当時の東京大学の資料の上から確認してみると、たとえば明治十三年度の英文『一覽』には、ホートン教授の出題した問題として次のような試験問題が掲載されている。

- 一 ハムレットと母親との関係、ならびにオフィーリアとの関係を論ぜよ。
- 二 ポロニアスとレイアーティーズの性格。
- 三 『リア王』におけるコーディーリアと道化。<sup>(22)</sup>
- 四 グロスターの苦難とリアのそれを比較せよ。

〔以下、五、六、七問省略。原文は英文。〕

確かに、ここに問われているのは「劇中人物の性格解剖」である。二番目の「ポローニウスとレイアーティーズの性格」を論ぜよ」という問題もそうだし、三番目の『リア王』におけるコーディーリアと道化「を論ぜよ」という質問もその類いのものである。さらに、われわれが注目しなければならないのは、問一の「ハムレットと母親との関係、ならびにオフィーリアとの関係を論ぜよ」という質問である。これは、単なる作中人物の性格分析ではない。そこから一步踏みだし、問題をその性格と性格が織りなす人間模様にまで発展させた、実にハイレヴェルな質問といえる。逍遙は、大正五年刊行の翻訳『マクベス』に付した一文の中で、「劇中人物の性格解剖を試みたのは、日本に於ては、ホートン氏が全くの第一人者であつたらう」と述べているが、単なる「性格解剖」どころか、それを基礎とした人間関係の綾にまで関心を向けた本格的なシェイクスピア講義であつたことがこれらの問題からは推察できるのである。

逍遙が、ホートンに「王妃ガートルードのキャラクターの解剖」を命ぜられて、不本意な点数をとつたというのは、これを見るかぎり間違いない事実のように思われるのだが、「回憶漫談」における逍遙の述懐は、かならずしも史実と一致するものとは限りは限らないようだ。たとえば、逍遙は『ハムレット』の試験で「命ぜられ」たのは、「王妃ガートルードのキャラクターの解剖」であつたと述べているが、上の試験問題をみると、問われているのは「王妃ガートルードのキャラクターの解剖」ではなく、「ハムレットと母親との関係」ないしは「ポローニウスとレイアーティーズの性格」の「解剖」ということである。明治期の英語・英文学の研究史に詳しい上野景福氏は、この逍遙の証言と試験問題とのわずかな「ずれ」をとりあげて、「逍遙を発奮させた試験問題——ずれた記憶二つ——」という、興味深い論文を『英語青年』誌上に発表している(一九八八年四月号)。上野氏の所見によれば、「回憶漫談」(大正十四年七月『早稲田文学』掲載)の記載事項には、四十五年前の古い思い出を辿っているせい、肝心なところで逍遙の記憶の「ずれ」が二つ見受けられるという。一つは、彼が東京大学の試験に失敗して落第したのは明治「十五年の卒業試験」であつたと言っているが、実は十三年度の学年末試験(十四年夏実施)の誤りであるということ。そしてもう一つは、その十三年度を実施された試験の中の『ハムレット』の問題は、「王妃ガートルードのキャラクターの解剖」ではなくて、「ハムレットと母親との関係」ないしは「ポローニウスとレイアーティーズの性格」の「解剖」であつたという点である。なぜ

そのような違いが生じたのかということについて、上野氏は、「ホートン出題の最初の二問が、渾然とからみあつて、『王妃の性格』という幻の問題に無意識のうちに合成され」たのだろうと推測している。つまり、上野氏の標題にあるとおり、逍遙の記憶の「ずれ」だといふのである。

しかし、この上野氏の論文には、一つ重要な点で事実の誤認がある。逍遙が失敗したのは確かに十三年度の学年末試験であったが、その十三年度に逍遙に課せられたのは、上に掲げた「ハムレットと母親との関係……を論ぜよ」云々の試験ではない。それは、逍遙たちより一年上の坪井九馬三や嘉納治五郎たちに出題された試験問題であった。つまり逍遙の記憶の「ずれ」は「二つ」ではなくて「一つ」であつたというわけである。なぜそのような事実の誤認が生じたかという点、上野氏は、明治十三年度の英文の『一覽』に掲げられている名簿と試験問題を同一年度内のもつと受け止めてしまったためである。確かにそこには、文学部三年の在籍者の一人に「Yuzo Tsubouchi」の名前がみえるし、学年末試験の文学部三年の試験問題として、上記の「ハムレットと母親との関係……を論ぜよ」云々の問題も掲げられている。しかし名簿の学年はそれでいいが、その試験問題の方は明治十三年度の問題ではない。それはその前年度、すなわち明治十二年度に出題された試験問題だったのである。当時東京大学などで発行されていた『一覽』というものは、年度の終了後に文部省宛てに提出する学事報告（『年報』）とは違って、年度の初めに主としてその年の講義内容を学生や教員等に知らせることを目的として出版された（したがって、英語では *Calendar* であろう）。上野氏は、その『一覽』と『年報』を混同して、「東京大学英文年報」に「坪内三年のときの試験問題」があると受け止めてしまったのである。上野氏の試みを多として、実際に逍遙がその年に受験した試験問題のうちシェイクスピア関係の問題を掲げておく<sup>(25)</sup>と、それは、「次なる人物 (Character) の概要を記せ——シーザー、キャリバン、ジェイクイズ、リチャードの叔父のヨーク公」というような問題であつた。やはりこれも作中人物の性格と密接に絡むもので、この点から判断しても、逍遙は「回憶漫談」に回想するとおり、三年次以降の試験で「ガーツルードのキャラクターの解剖」を「命ぜられ」という可能性は高いのである（残念ながら逍遙に課された三年次以降の試験問題については私はいまだ目にしたことがない）。

ともあれ、それが「ガーツルード」であつたにせよ、あるいはポローニアスやシーザーであつたにせよ、肝心なのは、逍遙がその「キャラクターの解剖を命ぜられて、初めての時には其意味が解りかね、『性格を評せよ』といふのだからと、主として道義評をして、わるい点を付けられ」といふ点である。「回憶漫談」のなかで、逍遙が自ら語っているところによれば、彼はホートン

ンに悪い点を付けられたことに発奮して、はじめて西洋小説の評論を読み漁り、その勉強が後に、日本で最初の本格的な小説論となった『小説神髓』に結実していったのだという。つまり、『小説神髓』が誕生するきっかけは、ホートン教授の英文学講義にあったということになる。このように、ホートン教授のシェイクスピア講義が草創期の近代文学の流れに投じた影響には少なからざるものがあつたということができるのである。

### 3

逍遙が、ホートンの課題に答えるべく西洋の書物を読み漁るなかで掴みとつたものは、単に「写実」を旨とする新しい小説のあり方だけではない。日本の文芸界が今後目標とすべき新しい演劇のあり方も、同時に、その自己学習をおして彼の脳裏に意識されるようになっていったのである。それがはつきりとした形で現れてくるのは、『小説神髓』の発表よりもややおくれて、明治二十四年になってからのことであつた。その年、逍遙は、自らが教鞭をとる東京専門学校内に「朗読会」なる研究会を起こす。その「朗読会」が、明治の演劇界に新生面を切り開きわけて重要な文芸運動へとつながっていったことは、逍遙自らが語る次の一文からも明らかである。

《私は明治二十四、五年頃に朗読法の修行に志し、少数の同志を集めて其会を催し、其後、其会は潰れたが、更に別の会を私宅に起して、遂にそれを易風会と称したものにまで発達せしめたのは是れが為であつて、局外者が作劇もしくは演劇刷新に資するの途は、さしあたり、之れより外にないと信じたからであつた。右の易風会が、後に文芸協会と進化したのであつた。》<sup>(62)</sup>

つまり、明治三十九年に彼が中心になつて開設される「文芸協会」の原点はこの「朗読会」にあつたというわけである。「局外者が作劇もしくは演劇刷新に資するの途は、……之れより外にない」、そうした強い信念のもとに始められた彼の朗読会は、日本の演劇界に今後進むべき新たな方向を示すという、いわば羅針盤の役割を果たすものであつた。そして、その新たな運動もまた、のちに詳述するようにホートン教授のシェイクスピア講義に端を発するものであつたとすると、われわれとしてもそれを詳

しく調べてみないわけにはいかない。とりわけ、ホートンが行った講義というのが、主としてシェイクスピアについての講義であったことを考えた場合、われわれはそれが新しい小説論に投じた影響ばかりか、新しい演劇運動に与えた影響についても、当然詳しい調査の光を投げかけてみないわけにはいかないのである。

ということでは、まずは、逍遙のいう「朗読会」とはいかなるものであったのか、そのことの確認から始めてみることにしよう。逍遙は、明治二十六年に「読法を興さんとする趣意」(『小羊漫言』所収)という一文をものして、彼の意図するところを世に訴えている。それによると、彼のいう「読法」というのは、世間一般の朗読法とはだいぶ趣を異にする、独自の「読法」であったことがわかる。その要点を一言でいうならば、文法・修辭・論理に気を配りながら言文一致の文章を読んでいくというものであり、彼はそれを「論理的読法」と名づけている。逍遙自らの説明によってそれを確認すると概略次のようなものである。

《論理的読法にては……専ら其文章の深意を穿鑿し(批評)、否むしる其文の作者、若しくは(院本ならば)、其人カラクタ物の性情を看破し(解釈)、自家みづからが其作者、若しくは其人物に成りたる心持にて、其文中に見えたる性情をもて直に自家の性情の如くにし、誠実熱心に肺肝を傾けて、慷慨せるが如く、悲憤せるが如く、哀傷せるが如く、憤怒せるが如くに読まんとするなり》

逍遙は、この朗読法を明治二十六年にはじめて公にして以来、生涯一貫してそれを主張し続けていった。たとえば、最初の発表から三十七年を経た昭和四年にも「脚本朗読研究の必要」という文章を認めて「論理的読法」の実践を世に訴えている。その主張の核心部分は、三十七年前のそれとほとんど変わっていない。すなわち、「論理的読法」といふのは、欧米に謂ふエロキューション(能弁術)をわが国文を読む場合に適用したものだといつてよい。……論理的或ひは心理的といふのを以て其れの通称とした理由は、……一語、一句の論理的内容に留心し、与へられた文章を書いた当人即ち原著者の心理的態度に同化して読む式だからである」と。以上のことを総合すると、「論理的読法」というのは、第一に、「欧米に謂ふエロキューション(能弁術)」を「国文を読む場合に適用したものである」ということ。そして、それは「原著者の心理的態度に同化して読」んでいく朗読法であった、ということになる。

この説明を上に掲げた明治二十六年の文章と重ね合わせることで見えてくるのは、逍遙が「論理的詠法」を考案する際に拠り所にしたと思われる着想の原点である。その因つて来るところは大きく分けて二つある。一つは「欧米に謂ふエロキューション（能弁術）」であり、もう一つは、脚本の場合を例にとると、「人カラクタル物の性情を看破」するという「心理解剖」である。つまり、その着想の根本にあったのは、煎じ詰めると、サマーズが東京開成学校で行った「朗読」「暗誦」中心のシェイクスピア講義と、ホートンが東京大学で行った、作中人物の「性格解剖」を主とするシェイクスピア講義という、二つの文学講義に帰着する。逍遙は、自分が大学時代に体験した二つの英文学講義を基礎として、それを深化発展させる形で独自の朗読法を考案していったのである。

サマーズの授業とホートンの講義——この二つの授業のうち、前者については逍遙は直接それを受講する機会がなかった。そのことを承知の上で、私が、ここに逍遙が体験した二つの英文学講義といったのは、逍遙がサマーズの残した教育法の流れの中で、英語・英文学の手解きを受けたという意味においてである。つまりサマーズの「暗誦」「朗読」を中心とする教育法というのは当時一種の流行となっていた教育法であったというわけである。逍遙によれば、欧米においても、十九世紀中ごろまでは、エロキューションの効用が盛んに喧伝されて、各学校は生徒に「暗誦法もしくは朗読法を研鑽させ、未来のシセロやデモステニスやバークやシェリダンを養成しよう」と力め「た」という。サマーズはその学統を汲んで、日本の学生にシェイクスピアの「朗読」「暗誦」を奨励していったのだ。そうした教育法が、受講者をして英語と日本語の間に存在する言語構造の相違を意識させ、その違いを意識するなかから、新しい演説法が生まれ、新しい詩歌創造の試みがなされていったことは、前に指摘したとおりである。サマーズが行った「朗読」中心の授業の流れは、日本でも一つの大きな潮流となって、その後の英語教育の方向を左右していく。それが目に見える形で表われたのが、彼が用いたアンダーウッドの『英文学集』の流行であった。本書は、東京大学はもちろんのこと、札幌農学校、同志社、東京専門学校などでも教科書に採用されて、明治十年代の学生たちの文学趣味の醸成に役買っていった。<sup>(29)</sup>しかも、注目すべきことに、その教科書の使われ方は、サマーズがそうしたのと同様、主に「読み方」の教科書として使用されたことが当時の学校関係の資料からうかがえる（『東京専門学校年報 明治十五年度』<sup>(30)</sup>参照）。逍遙は、サマーズの教えを直接受けることはなかったが、彼が残した英語・英文学教育の伝統は充分体験しうる状況にあったのである。

そしてこのサマーズ式のシェイクスピア講義に、ホートンの「作中人物の性格解剖」を重ねて、考案されたものが「論理

的読法」というわけだが、彼の朗読法の一方の柱としてホートン式の「性格解剖」がいかに重要なものであったか、それは先に引用した「(院本ならば)、其人 カラクタ 物の性情を看破し(解釈)、……誠実熱心に肺肝を傾けて、慷慨せるが如く、悲憤せるが如く、哀傷せるが如く、憤怒せるが如くに読まんとするなり」という文章が示すとおりである。彼の提唱する「論理的読法」にしたがって、たとえば君子を読もうとすれば、まず人は君子の心を理解する必要がある。シャイロックの台詞を読むときは、剛愎堅忍、執拗なる性格を、マクベスならば、邪念燃ゆるがごとき賊臣の心を理解して始めてそれが可能になると、逍遙は説く。つまり、彼の「読法」はホートン式の「性格解剖」なくしては成り立ちえない朗読法であったということができるのである。

では、こうした新しい朗読法を世に広めようとする逍遙の狙いは一体どこにあったのか。先ほどの「読法を興さんとする趣意」によれば、その狙いは、第一に「人性研究」にあった。マクベスやハムレットなどの台詞をとおして、それらの人物の「性情を探り、天命の一端を窺ひ知る」手段となさんというのである。しかし、こうした建前上の目的とは別に、もつと実質的な逍遙本来の狙いが存在したことをわれわれは見逃してはならない。それは、冒頭に引用した文章の中で、彼自身が朗読会の設立の目的について、「局外者が作劇もしくは演劇刷新に資するの途は、さしあたり、之れより外にないと信じたからであつた」と語っているのをみてもわかるだろう。要するに、逍遙の目的はただ一つ、日本の演劇界の刷新とすることを外にはなかつたのである。明治二十六年当時、それを前面に押し出して主張することができなかったのは、彼の朗読会を単に「俳優の仮声を学」ぼうとする「文学亡国」の徒の集まりと誹謗するものがあつたためである。そうした批判をかわすために、「人性研究」という大義名分を全面に押し出さなわけにはいかなかったのだ。しかし、逍遙の本当の狙いが当時の演劇界の刷新におかれていたことは、「読法を興さんとする趣意」に記された文章からも確認することができる。すなわち、その結論の一文にいわく、「ドラマは元と俳優に伴ふべきものなり。然るに今や文園、戯曲を興さんとする時に当りて、汝ドラマを作るとも、俳優は之を演ぜざるべし(具にいへば汝の作を有形にし解釈し説明する者絶えて無し)、……我所謂朗読法の本願は人性研究にありと雖も、其第二の誓願は、此欠乏を補う」にある、と。当時の劇壇というのは、作家がいくら骨を折って新しい脚本を世に問おうとしても、それを演じる真の俳優が存在しないという未開の状態にあつた。彼の「読法」は、人性研究に資するという目的とは別に、もう一つ、この日本演劇界の欠を補い、未来のシェイクスピア、未来のゲーテの「説明者」「批評家」を世に生み出すという切なる願いが込められていたのである。

「論理的読法」が日本の演劇界の刷新に貢献することができたのは、単に俳優の養成という点においてはばかりではない。それは同時に、舞台芸術には欠かせない監督や演出者を養成する上でも大いに資するところがあった。少なくとも、逍遙にとっては、「論理的読法」は、単に俳優ばかりか、監督や演出者にとっても、彼らが技術や能力を磨く上で一度は経なくてはならない訓練の一過程として意識されていた。そのような考え方が、後に彼をして次のような言葉を吐かせることになる。

《私は、舞台監督とか新演出者とかいふ役をする人々は、十人並以上の朗読術ぐらゐは長じてゐなければならぬと思ふ。朗読術が外国の所謂エロキューション程度に呑込めてゐれば、或局外者の作に散見するやうな、あゝいふ無理な、到底言ひ回せないやうな、妙な白（セリフ）を書く筈もなし、さういふ作を採用する筈もなし、また自分が相応に朗読ができれば、他人の朗読や白（セリフ）回しの拙劣は著しく解るから、自然と「だれ場」の刈込にも手が届く道理である。<sup>(31)</sup>》

逍遙は、新しい「小説論」、新しい演劇運動、新しい翻訳文学と、様々な方面で日本文学の刷新を企図していったが、そうした数ある彼の文学上の試みの中でも、この「朗読法」の場合ほど、根底を支える「信念」ないしは「思想」が一貫して変わらぬものも稀であった。明治二十六年の「読法を興さんとする趣意」の中で語られていることも、昭和四年の「脚本朗読術研究の必要」の中で主張されていることも、ほとんどその中心をなす考え方に変化は見られない。わたしたちが、この終始一貫した彼の「朗読法」を問題にする際に、第一に心に留めなければならないのは、それが単なる机上の空論ではなくて、演劇刷新を念頭に置いた一つの実践の手引きであったということだろう。逍遙はただ回りのものに「論理的読法」を勧めるだけにとどまらず、自らその実践に努めていった。生徒に教え、同僚を語らい、ときには京都、大阪に出張してまでその実演に心がけた。その様子は、昭和九年に書かれた「沙翁劇訳本の朗読」と題する文章の、次の一節からもうかがえる。「『シェイクスピア劇の』朗読とても、六十年以前までは、どうにか、斯うにか、其昔、文芸協会で、半夢中になつて生徒連を教へてゐた時分の名残を留めてもゐたのだが、段々裏打や挿し入れ齒の数が殖えて来た現在では、逆も心で思ふやうにはやれない。第一、声量が減衰した。で、昭和四年の初夏、演劇博物館の為に、勸進帳を読む心持で、京、阪方面までも出張したを最終に、少くも公けの場所では、自作と言はず、訳と言はず、もう朗読はすまい、と決めゐた<sup>(32)</sup>」。昭和四年といえ、逍遙七十歳のときである。そんな歳にいたるまで、彼は自身の



提唱する「朗読法」の普及に力を惜しまなかったのである。いや、七十を過ぎたのちだつて、放送局から頼まれれば断り切れず、『ハムレット』や『ジュリアス・シーザー』の朗読を披露したり、さらには「コロンピヤ社」のレコードにその朗読を吹き込むことさえしているのだ。「局外者が作劇もしくは演劇刷新に資するの途は、……之れより外にない」、逍遙がいつになく強い口調の下に語ったこの信念の証しは、こうした生涯の実践のなかにこそ求められなければならないだろう。

このように、ホートンのシェイクスピア講義は、単に『小説神髓』誕生のきっかけをつくったばかりか、日本の演劇界の刷新にも大きく貢献していった。逍遙はホートンによつて与えられた「ガーツルードの性格解剖」の課題を命題として、自らの啓蒙に努めた結果、一つには今後日本の文学界が目指さなければならぬ小説のあるべき姿が、そしてまた一つには今後の舞台芸術に対し作家として貢献しうる方法がおぼろげながらみえてきた。ホートンの講義が行われてから「朗読会」が設立されるまでには、約十年ほどの歳月の経過があつたが、その十年間というものは逍遙の作家活動にとつては非常に意味のある十年間であつた。

その間に、逍遙の境遇は、学生という私的な立場から教師という公の立場に変わった。彼の創作の視点も、それにともない、学年末試験に対する解答という私的なものから、専門にシェイクスピア劇を講じる教師として、日本の演劇界のありかたを探るといふ公のものへと変わつていった。そして、なにより逍遙自身が様々な文学上の研鑽と体験を積んで、大きく成長を遂げていたのである。『小説神髓』のときには、「後に二葉亭に其根底を叩かれ」、「何も無い」と答へないわけにはいかなかった<sup>(33)</sup>ほど薄弱な論拠も、「論理的読法」になると、「局外者が作劇もしくは演劇刷新に資するの途は、……之れより外にない」と断言できるほど、確たるものになつていった。彼の朗読法が、晩年になつても、なおかつ命脈を保ちえたというのも、一つには、この十年の間に逍遙自身が経験した立場の変化、あるいは文学的な成長が大きかつたとみなくてはならないだろう。

ともあれ、逍遙は、サマーズを始め、ホートンが発展させたシェイクスピア研究と、悪戦苦闘をくりかえしながらも、真正面から取り組んでいった。それが、同校に学んだ幾多の俊秀同様、彼をして真の西洋文化・西洋文学への覚醒を促し、同時に日本の文化と文学に対する深い省察へと導くことになつた。そこから新しい小説論の試みが生まれ、そして演劇刷新の実践的方法が案出される、というように、当時の東京開成学校・東京大学等の文学講義には、そこに学んだ学生が、やがて新生日本に相応しい新たな技術や制度、芸術・文化を模索する立場にたつたとき、その知識や発想の抛り所ともなるような数多くのヒントやきっかけが随所にちりばめられていたのである。われわれは、この近代日本文学の生みの親ともいふべき当時の高等教育に、あるい

はその教育を支えた教師や書物に、さらにはそれによって育まれた学生の動向に、もっと大きな注意を傾けてみなければならぬであろう。

[注]

- 1 *The Calendar of the Tokio Kaisei-Gakko, or Imperial University of Tokio for the Year 1875*, Published by the Director, 1875.
- 2 *Ibid.*, pp.105-106. サマーズが「第三級」に課した試験問題の全文は以下のとおり。
  - 1 Distinguish poetry from prose, and name some kinds of each.
  - 2 What is the Drama, and what influence had it upon English Literature?
  - 3 Give a short history of the Drama in England. Who wrote the first English Tragedy? Give an analysis of the first two acts of it.
  - 4 What influence respectively had Chaucer, Shakespeare and Milton on English Literature?
  - 5 Why is Shakespeare held in such high esteem? and why is Spenser less read than Shakespeare?
  - 6 Give the characteristics of these writers and those of Milton.
  - 7 Write ten lines from Hamlet's address to his father's ghost, and paraphrase a few lines.
  - 8 Explain the expressions: —
    - “I find thee apt.”
    - “The whole ear of Denmark.”
    - “Is by a forged process of my death Rankly abused.”
    - “The serpent that did sting thy father's life, / Now wears his crown.”
    - “Taint not thy mind, nor let thy soul contrive / Against thy mother aught.”
    - “The glowworm shows the matin to be near, / And 'gins to pale his ineffectual fire.”
    - “Remember Thee!”
    - “Ay! thou poor ghost! While memory holds a seat / In this distracted globe.”
    - “I'll wipe away all trivial fond record, / All saws of books.”

9 Whence did English literature get its highest inspiration? From what events, traditions or circumstances?

10 Mention the names and works of six eminent writers of the eighteenth and nineteenth centuries.

3 Francis H. Underwood, *A Hand-Book of English Literature, British Authors*, Lee and Shepard, 1877.

国立国会図書館所蔵本は、このように一八七七年の刊行となっているが、これは重版で、本書の版權登録は一八七一年である（国会図書館の検索カードには一八七一年版も所蔵とあるが、当版は目下行方不明とのことで筆者はそれを目にするのができなかった）。同じく『米文学集』の刊記は次のとおり。ただし、こちらも重版で序文の日付は一八七二年七月になっている。

Francis H. Underwood, *A Hand-Book of English Literature, American Authors*, Lee and Shepard, 1875.

4 *Fifth Annual Report of Sapporo Agricultural College*, 1881, p.36.

引用箇所 of the 英文は以下のとおり。

The common error is to advance the student by rapid steps to new matter before the old has been fully mastered. For this reason the committing to memory from time to time passages from good authors has an important and invigorating effect on the minds of students of language.

5 武信由太郎「余の英語研談」『英語世界』三卷一号（一九〇九年一月）四六頁。

6 前掲、英文『札幌農学校第五年報』三六頁。引用箇所 of the 英文は以下のとおり。

One hour in the week was devoted to elocutionary exercise in the repetition of some good passage from an English classical author. By this means the class has been familiarized with standard style in English. Their Pronunciation has thus improved, and they have, I trust, caught something of the rhythm a spirit of the language.

7 坪内逍遙「読法を興さんとする趣意」『小洋漫言』（有斐閣書房、一八九三年六月）一五一頁。

8 『東京開成学校／文庫書目／英書之部』（一八七五年）。本書は和文の標題以外はすべて英文。英文の書名は、*A Classified List of the English Books in the Tokio-Kaisei-Gakko*. 本リストの「文学」の項は、四部門（「文学史」「文例集」「読本」「隨筆ほか」）に分けられ、全部で五五点の書名が掲載されている。

9 前掲書における本書の記載事項は次のとおり。「Student's Specimens of English Literature. by T. B. Shaw……4」末尾の数字は同文庫の所蔵冊数。

10 『東京開成学校一覽 明治九年』（無刊記）五五―五六頁。筆者の所蔵本は和文・英文の合冊本。

11 『東京大学法理文学部／図書館英書目録』（本部図書館印行、一八七七年）。表紙に「明治十年（九月調査）」とある。本書も表紙の和文

- 標題と刊記以外はすべて英文。
- 12 前掲書におけるこの二種類のシェイクスピア関係の書物の記載事項は次のとおり。  
SHAKESPEARE. Works of. Ed. by Dyce. 9 vols.  
Shakespeare Gems. By the author of "The Book of Familiar Quotations".  
13 *A Classified Catalogue of the Books in the English, French and German Languages of the Tokio Shoseki-Kwan or Tokio Library*, 1876. 序文の日付は明治九(一八七六)年六月二十七日になっている。
- 14 前掲書におけるこの作品集の記載事項は次のとおり。  
The same [Works of Shakespeare], edited by R. G. White. 12mo, 12vol. Boston 1872.  
15 この四書を代表して『ハムレット』の出版事項を掲げておく。  
*Hamlet, Prince of Denmark*, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, Oxford, 1872.  
なお、本書のタイトルの上部には「Clarendon Press Series / Shakespeare / Select Plays」の文字がある。
- 16 十一年、十三年の目録の和文・英文タイトルを以下に掲げる。  
『東京大学法理文学部／図書館英書目録 第二 自明治十年九月 到同十一年九月』 *Supplementary Catalogue of the English Books and Pamphlets in the Library of the Departments of Law, Science, and Literature, Tokio Daigaku*, 1878.  
『東京大学／法理文学部／図書館洋書目録(図書館印行 一八八〇年)』 *Catalogue of Books in European Languages in the Library of the Departments of Law, Science, and Literature, Tokio Daigaku*, 1880.
- 17 十三年の目録における同作品集の出版事項は次のとおり。  
Works of [Shakespeare] by H. N. Hudson. 11vols.  
18 ホートン (William Houghton) は、明治十年三月から同十五年七月まで東京大学に在職。月給はサマーズと同じ三百円。
- 19 ホートンの使用した教科書については、明治十年度以降の『東京大学年報』に掲載された彼自身の「申報」による。なお、ホートンの在職した期間の同大学の『年報』は、復刻版『東京大学年報』一、二巻(東京大学出版会、一九九三年三月、六月)に収録されている。
- 20 坪内逍遙「回憶漫談」『早稲田文学』(東京堂、一九二五年七月)五頁。
- 21 坪内、前掲文、五頁。
- 22 *Tokio Daigaku, the Calendar of the Departments of Law, Science, and Literature, 1880-81*, published by the University. 1880. 166-67p.

- 23 坪内逍遙「付録／日本に於ける沙翁研究、翻訳、翻案、及び上演の略史」『マクベス』（早稲田大学出版部、一九一六年三月）三頁。
- 24 上野景福「逍遙を発奮させた試験問題——ずれた記憶二つ——」『英語青年』（研究社、一九八八年四月）二五頁。
- 25 ここに引用した問題の原文は次のとおりである。なお文中の Jessies は Jaques の誤記か。
- Give the outline of the following characters :——Caesar, Caliban, Jessies and Richard's Uncle the Duke of York.
- 26 坪内逍遙「脚本の朗読法」『逍遙選集』一一卷（春陽堂、一九二七年二月）。
- 27 坪内「読法を興さんとする趣意」、一三七頁。
- 28 坪内逍遙「脚本朗読術研究の必要」『逍遙選集』別冊五（第一書房、一九七八年二月）五二五—二六頁。本文の初出は一九二九年（『週刊朝日』）。
- 29 アンダーウッドの『英文学集』の流行については、拙稿「西欧文学との出会い——ジェイムズ・サマーズと東京開成学校の英文学講義『ヴェルヌ集Ⅱ』明治翻訳文学全集（『新聞雑誌編』）二八（大空社、一九九七年一〇月）参照。
- 30 『東京専門学校年報 明治十五年度』（早稲田大学出版部複製、一九八二年一〇月）八頁。同頁に綴じ込まれた科目表のうち「英学科」の科目表参照。
- 31 坪内「脚本の朗読法」。
- 32 坪内逍遙「沙翁劇訳本の朗読」『逍遙選集』別冊五（第一書房、一九七八年二月）三二五頁。本文の初出は一九三四年一月。
- 33 坪内「回憶漫談」、五頁。